

出会い系メディアのコミュニケーションに関する分析

－現代社会における匿名的な親密さ－

圓 田 浩 二

要 約

本稿では、しばしば非難の対象となりやすい出会い系メディアにおけるコミュニケーションを取りあげる。出会い系メディアの変遷と、出会い系メディアが提示するコミュニケーションの特性と可能性に言及しながら、なぜ人々はインターネット上に存在する出会い系サイトを使用するのかということ、**「現代社会における匿名的な親密さ」**という観点から考察する。この種類の出会い系のシステムは、これらのメディアが不特定の相手とのコミュニケーションを媒介する。この出会い系システムを通してコミュニケーションによって得られる利得は、見知らぬ人(異性に限定されない)とのコミュニケーションの喜びであると考えられる。その喜びには、役割演技(振る舞うこと)を通してコミュニケーション、いろいろな興味(趣味など)を共有するコミュニケーション、匿名的な出会いを刺激されるセックスとロマンスに関する欲望、そして秘密のコミュニケーションなどがある。

キーワード：出会い系メディア、匿名的な親密さ、コミュニケーション

1. 問題の所在

今日、出会い系メディアは児童買春や「援助交際」を始め、さまざまな社会問題を引き起こしている。例えば、「出会い系」という言葉で検索すると、「Yahoo!」では4,052,347件のページがヒットし、「google」では1,020,000件がヒットする(2005.4.18)。また、「出会い系」と「犯罪」という言葉で検索すると、「Yahoo!」では450,566件のページがヒットし、「google」では114,000件がヒットする(2005.4.18)。「出会い系」と聞けば、ネガティブで反社会的なイメージを抱く人も多いのではないだろうか？

本稿では、出会い系メディアとは、不特定の人間とのコミュニケーションを仲介するメディアを指す。援助交際などの犯罪の温床として語られがちな出会い系ではあるが、「Yahoo!パーソナルズ」や「エキサイトフレンズ」などでは、趣味の合う友だちやメル友を探す目的で多くの人が登録している。「Yahoo!パーソナルズ」に登録されている自己紹介の数は7万件以上であり、「エキサイトフレンズ」では約350万人の会員数を誇っている。

本稿の目的は、今日非難されがちな出会い系メディアのコミュニケーションを取り上げ、なぜ人々は出会い系サイトを利用するのかという問いを念頭に、出会い系の歴史と変遷に言及しつつ、出会い系メディアのコミュニケーションの特性と可能性について考察する。

この作業を進めていくことは、コミュニケーション論的に、あるいはメディア論的に歓迎されることではないかもしれない。インターネットというメディアは大きく取り上げられ、ポジティブに評価され、分析されているが、「出会い系サイト」となると人々は好意的には受け取っていないと思われる。出会い系サイトに先駆的メディアであった、テレフォン・クラブ、伝言ダイヤル、ツーショットダイヤルなどの電話風俗とインターネットの関連性について、メディア学者の加藤晴明は次のように述べている。「電話風俗とインターネットの“連続性”などは情報社会

論のタブーでさえある」[加藤 2001 p.4]。本稿の副題に「出会い系」という言葉が含まれているが、本稿のもう一つの目的はこの「タブー」をタブーとしないためのコミュニケーション論的分析にある。そのために、出会い系の歴史と変遷に言及しつつ、出会い系メディアのコミュニケーションの特性と可能性について考察しなければならない。

なお、本稿で用いるコミュニケーション概念とは日常人々が使用する発話－情報－伝達－受容－理解のプロセスの積み重ねを指している。

2. 出会い系メディアの歴史と変遷

出会い系メディアとは、不特定の人間とのコミュニケーションを仲介するメディアである。現代社会では、インターネット上に存在し、パーソナル・コンピュータや携帯端末から簡単にアクセスできる出会い系サイトがその代表であろう。

日本における出会い系メディアの歴史を紐解くと、古くはシステムとして江戸時代から存在していたようである。「出会いシステムの歴史」[井上 2002 p.45]によれば、江戸時代には「肝煎業」という名の結婚相談所らしきものが庶民の間で広がった。明治13年には「高砂業」という職業で、「養子女婿嫁妻妾縁組仲媒取扱所」を設立される。

婚姻相手を捜すのではない出会い系のシステムを探すならば、古くは雑誌などに載っていたペンフレンド募集や文通コーナーがそのプロトタイプに当たるだろう。明治末期から発刊された少女雑誌の「売り」は文通コーナーであった。

近年になると、出会い系メディアは結婚相談所や雑誌の文通コーナーとは違った形を取るようになる。例えば、1985年に誕生したテレフォン・クラブ（テレクラ）を先駆けに、ダイヤルQ2、伝言ダイヤル、ツーショットダイヤルなどの「電話風俗」^①や、1995年発刊の個人情報誌『ジャーマル』、1987年に数字表示が可能となり1995年にはドコモグループ契約数だけで600万台を数えたポケットベルなどがあげられる。ポケットベルだけを使用してコミュニケーションする相手は「ベル友」と呼ばれた。その後、出会い系サイトが急成長し、インターネットを通じての友達探しや恋人探し、電子メールを交換し合うだけの「メル友」が一般化してくるようになった。

また、テレビ・メディアにおいて見知らぬ男女の出会いと恋愛とが主要なテーマとして放映される。1987年放送開始された、見知らぬ男女が番組内でカップルになるという構成の番組『ねるとん紅鯨団』は、全盛期には視聴率25%を稼いだという [井上 2002 p.47]。同じような内容の恋愛バラエティ『あいのり』は深夜枠にもかかわらず平均視聴率18%を誇ったという [井上 2002 p.41]。このことも、見知らぬ男女の出会いと恋愛を積極的に肯定していく契機になったと考えられるだろう。

さらに、インターネット上での出会いや恋愛が大きく注目を集める契機となったのが、映画やテレビ・ドラマのヒットであった。映画『ハル』(1995年)や映画『You've Got Mail』(1998年)、テレビ・ドラマ『WITH LOVE』(1998年)などでは、電子メールなどから始まる恋愛が美しく描かれた^②。メールでの出会いや恋愛が理想化され、出会い専門のサイトが成長していく契機となった。

この点について、パソコン通信、インターネットにおいては、「美しい物語」として描かれたコミュニケーション特性が、電話風俗では、「ネガティブイメージの物語しか形成できなかった」[加藤 2001 p.44] ことは指摘しておく必要があるだろう。同じ出会い系メディアでありながら、その出会いの評価が正反対になった理由は、メディアそのものの出発点にあると考えられる。電話風俗の先駆けであるテレフォン・クラブが当初テレフォン・セックス相手を捜すことを目的にしていたのに対し、インターネットはアメリカ合衆国の軍事利用から転用され大学間の学術用

ネットワークと整備されていったメディアの政治的な位置づけにあるのかもしれない。

出会い系コミュニケーションは、1999年のiモードサービスの開始がその引き金となって広がった。携帯電話からのインターネットへのアクセスが可能になった。つまり、携帯電話からウェブサイトが閲覧できるようになる。現在の出会い系サイトには、パソコンから利用できるサイト、携帯電話から利用できるサイト、その両方から利用できるサイトが存在する。安価に手軽にいつでもどこでも利用できるようになったため、それまでの何倍ものユーザーが出会い系サイトに利用するようになった。

現在、インターネット・携帯電話を媒介する出会い系は、出会い系サイトとしてひとくりにされる。出会い系サイトとは、「一般に面識のない者同士が出会うことを目的としてインターネット上に設置されたサイト」[インターネット上の少年に有害なコンテンツ対策研究会 2003 p.4] ^④とされる。

実際のところ、出会い系サイトの利用者はどれくらいいるのだろうか？ 株式会社マクロミルが2001年5月22日に行った「出会い系サイトに関するアンケート」(http://www.macromill.com/client/r_data/20010529deai01/gt.html)では、回収数519件のうち、「あなたは今までに「出会い系サイト」を使ったことがありますか？」という質問に対して、「使ったことがある」と答えたのは34.4%で、「使ったことはないが、使ってみたいと思う」が18.5%、「使ったこともないし、使いたいと思わない」が46.7%であった。

また、「使ったことがある」と「使ったことはないが、使ってみたいと思う」と答えた人々はその理由を、「なんとなく興味があったから」が41.6%、「メル友が欲しかったから」が32.1%、「恋人が欲しかったから」が12.8%、「メールや電話だけでなく実際に会える友達が欲しかったから」が10.2%となった。

「実際「出会い系サイト」を使ってみて、友達／恋人はできましたか？」(複数回答可)では、「メル友ができた」が73.0%、「実際に会って遊ぶ異性の友達ができた」が24.7%、「恋人ができた」と「電話で話す友達ができた」が7.9%となった。五年前のデータであるが、出会い系サイトの利用者の概要を知る指針となるだろう。

と同時に、出会い系サイト絡みの犯罪も増加してくる。「平成16年中のいわゆる出会い系サイトに関係した事件の検挙状況について」によれば、出会い系サイトに関係した事件は前年度より9.2%減少したが、2004年度の事件数は1582件である。また、その約78%が児童買春・児童ポルノ法違反や青少年保護育成条例違反、児童福祉法違反であり、未成年者を対象とした犯罪である。被害者1289人のうち、18歳未満の児童が1085人で84.2%を占める。また使用されるメディアの96.0%は、携帯電話である。重要犯罪(殺人、強盗、強姦など)95件で、前年度と比べて30.7%減少している。

この報告書を見るならば、児童を対象とした犯罪の温床であるかのような印象をもつが、実はそうではない。これについて、次の二点を指摘したい。一つ目は、出会い系サイトの利用者の大部分が成人男女であり、18歳未満は規定上利用できないとされている点である^④。二つ目は、出会い系サイトでは成人が児童を性的に搾取しているように思えるが、児童側からの働きかけや出会い系サイトの利用が存在している点である。次に、児童をも巻き込んでしまう、出会い系サイトの魅力、つまりコミュニケーション特性とは何なのかについて考察を展開する。

3. 出会い系メディアのコミュニケーション：匿名性と親密さ

出会い系メディアのコミュニケーションの形式は、一対一(パーソナル・コミュニケーション)でも、一対多(マス・コミュニケーション)でもない、多対多のコミュニケーションである、

n×nのメディア [宮台 1997 p.157] である。

出会い系メディアにおけるコミュニケーションの特徴とは、テレクラにおいては声によるコミュニケーションであり、相手の声の質、抑揚から相手を選別することができる。出会い系サイトでは、メールによるコミュニケーションであり、携帯メールならいつでもどこでも可能だが、煩雑なメールのやりとりが存在する。

出会い系メディアのコミュニケーションの特徴は匿名性にあると考えられる。誰の仲介もなしに、つまり誰にも知られずに、自分の全く知らない相手と知り合うことができる。自分が理想とする他者を捜し、その人とのコミュニケーションを行い、その快感や楽しさを味わうことができる。また、相手の顔や素性をわからない、知らないがゆえに、相手を理想化できるという利点がある。

知らない人とのコミュニケーションは、三つに分類できると考えられる。一つ目は自分本位のコミュニケーションであり、自己中心的で言いたい放題のコミュニケーションである。この種のコミュニケーションは日常会話と同様、継続することは難しい。

二つ目は、演技のコミュニケーションであり、自分の性別、年齢、住所、職業などを偽ることができる。典型的なものは、ネット上のコミュニケーションでは身元や容姿、声などが確認できないことを利用して、ネットワーク・コミュニティで女性のように振舞う男性であるネットワークおかま、通称「ネカマ」である。この演技のコミュニケーションが偽りのコミュニケーションとなって、さまざまな事件や問題を引き起こしている。これが出会い系メディアを犯罪の温床として認知される原因でもある。

三つ目は、秘密のコミュニケーションである。親密な相手には話すことができず、知らない人だから話すことができるというケースである。一般常識的には、相手がより人格的に親密であればあるほど、コミュニケーションの内容は濃密になるとされている。現代社会では、そのことが該当しなくなり、匿名の他者に親近感を覚える。本稿では、この現象を「匿名的な親密さ」と名付けることにする。

この背景には、現代社会における伝統的な共同体の崩壊と私的領域の増大があると考えられる。現代社会におけるメディアの発達と役割関係の多様化が伝統的な共同体の崩壊をもたらす。個人における公的な部分と私的な部分とが分離し、コミュニケーションが変容する⁹⁾。例えば、この人は仕事仲間としては信頼できるが、人間としては信頼できないなど。

現代社会においては、他者への信頼が一元的に親密さを産みだしコミュニケーションの全面的な開示をもたらすのではなく、役割関係の多様化によっていわば多元的な親密さが生じるため、コミュニケーションの伝達・受容は選択的に行われる。

通常の間人間関係では、私たちは人格的信頼にもとづいてコミュニケーションの相手と内容を選別する。通常、人格的に信頼しあう関係では両者がさまざまな考えや思いを披露しあえるというコミュニケーションの自由さがあると考えられがちであるが、実は必ずしもそうとは限らない。人格的信頼があるからこそその不自由さも存在する。病気、死、犯罪、性といった話題は、その事柄をコミュニケーションすることで、関係そのものが壊れたり変質してしまう可能性をもつ。匿名的な親密さとはこの人格的な信頼関係の不自由さにもとづいて、匿名的であるがゆえのコミュニケーションの自由さをあてにしている。

また、日常の対面的なコミュニケーションと出会い系サイトのコミュニケーションとの違いを一言で表現するならば、信頼と信用の違いと言い表せるかもしれない。日常のコミュニケーションが人格的信頼を資源としてそのコミュニケーションの質・量が決定される（信頼が強く大きくなるほど、相手とのコミュニケーションは複雑で意義深いものになる傾向がある）のに対して、

匿名的なコミュニケーションは、システムへの信頼をその資源とする。

私たちは、匿名的メディアがどのような仕組みで運営され、その内部でどのようなコミュニケーションをなされているのかを全く知ることはできないし、また知る必要もない。匿名的な他者とのコミュニケーションを行いたければ、あるいは出会いたければ、そのメディアに接続するだけでよい。

本稿では、匿名的な他者に抱く期待やそのイメージの元となるものを信用[®]と呼ぶことにする。匿名的で親密なコミュニケーションは、都市化や情報化が急速に進んでいる現代社会においては適応性が高いと考えられる。なぜなら個人がいくつもの社会的世界に出入りしいくつもの異なる顔をもつことは、個人の匿名化をますます進行させているからである。「大都市の大部分の人びとは何か大きなホテルで生活している人びとのように、互いに顔を合わせるが相手がどんな人かを知らずに生活している。その結果、より小さな地域社会にみられるような親密で永久的な結合は、偶然的・因果的關係へと変化する」[Park 1916=1965 p.91]。それは、対面的なコミュニケーションと比較すると明らかになるが、時間的余裕の増加と空間の拡大につながる。例えば、出会い系サイトでは、沖縄の少女と北海道の男性が知り合い、メールやチャット、電話でリアルタイムでコミュニケーションすることができる。それゆえ、現代社会において、個人は匿名性ゆえにコミュニケーションの自由を獲得すると表現できるだろう。

しかし、信用が抱える難点はリスク[®]の問題である。出会い系メディアを通じて、数多くの事件が発生し、報道されてきた。出会い系サイトでは、性別や身分、年齢、住所などを偽ることが容易である。それゆえ、詐欺やレイプ、誘拐などの犯罪を犯しやすい要因ともなっている。そのため、出会い系サイトについての評価が否定的になされたり、「出会い系サイト規制法」のような法的整備がなされることになる。

以上のように考えてみると、人間のコミュニケーションは社会とメディアの発達から、三つに分けることができるだろう。一つ目は人格的コミュニケーションであり、二つ目は役割的コミュニケーション、三つ目は匿名的コミュニケーションである。本稿では、出会い系メディアのコミュニケーションの本質を匿名的コミュニケーションにあると考えている。本稿では、出会い系サイトの犯罪誘発性とは別の観点から、コミュニケーション論的に考察する。

匿名的なコミュニケーションの利点はその自由度にある。日本的なコミュニケーションにおける本音と建前の使い分けについて考えてみよう。出会い系メディアの登場によって、ある人々に、本音を語ることのできるコミュニケーションが可能となった。このことは、従来の対面的で親密な人間関係が必ずしも「本音」と言われるコミュニケーションの全面的な開示をもたらさないことを示している。図1はこれを示したものである。本音をコミュニケーションすると、人間関係が壊

【図1】コミュニケーションの二つのタイプ

話題の性質	コミュニケーションの形式
建前	日常的なコミュニケーション
本音	匿名的なコミュニケーション

[圓田 2003 p.193]

れたり、蔑視されたりする可能性がある話題、例えば、当人の性や死、犯罪に関わる話題などは日常の社会関係におけるコミュニケーションには適格的ではない。

例えば、1998年に起こった「ドクター・キリコ事件」では、自殺願望をもつ女性がドクター・キリコと名乗る人物の主宰するインターネット上のホーム・ページから購入した毒物によって自殺を決行し、さらにその売り手であった当人も自殺した。ドクター・キリコは、ホームペー

ジ上で数多くの自殺願望者からの相談にのっていたという。あるいは、ネット心中があげられる。自殺願望をもつ男女がインターネットで知り合い、お互いの素性も知らないまま集団で自殺する。彼らは、匿名であるがゆえに、自らの自殺願望を表明することができたのである。

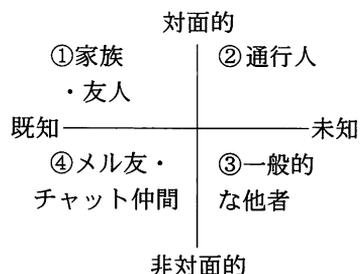
このことから、匿名的なコミュニケーションの特性の一つは以下のように考えられる。匿名性の仮面のもとに行われるコミュニケーションには人格的な信頼にもとづくコミュニケーションや、上司一部下や先生－生徒といった役割関係にもとづくコミュニケーションとは全く異なる側面があらわれてくる。お互いが匿名であるという状態は、素性や所属を明らかにしないために、社会関係の継続を生じさせない。

つまり、匿名的な存在であることが相手への気遣いや遠慮を排除し、無道徳(immoral)ではなく脱道徳的(non-moral)状況を作り出し、コミュニケーションの自由度を高め、自己開示に至らせる⁹⁾。また自己を偽ることも可能である。この匿名的なコミュニケーションにおいては、ある種の親密さが生じることで、家族や友人、あるいは公的な場面においてタブーとされる話題、性や犯罪、病気、死といった事柄についてのコミュニケーションが選択される機会が多いと考えられる。この親密さが匿名的な親密さである。

このことをわかりやすく理解してもらうために、縦軸に対面的－非対面的の軸を取り、横軸に既知－未知の軸を取ると、図2のようになる。私たちの日常の社会関係は①の領域に存在している。④には会ったことはないが、コミュニケーションが継続的に存在し、その人について何らかの情報を得ているタイプのコミュニケーションが該当する。

出会い系のコミュニケーションは④に存在している。かつては、近代社会までは「ストレンジャー」(異邦人)と呼ばれた人たちもこの枠組みに入る。現代社会では、このタイプの人々を次のように名付ける人たちも存在する。私生活から切り離されたメディア空間で出会う親密な他者「第四者」[速水 1999 p.181] や、通りすがりの他者との親密な関係「インティメイト・ストレンジャー」[富田他1997 p.21] である。その際、③から④への移動、つまり、③の「一般的な他者」イメージをもとに、④でコミュニケーションが行われる。そのため、出会い系メディアの利用者は、相手を自分にとって都合の良い理想的な他者としてとらえてしまう傾向が付随する。

匿名的で親密なコミュニケーションが想定する他者とは、理念的には、③に存在していると考えられる一般的な他者である。しかし、通常「われわれは、にぎやかな通りで出会っただれとでも親密になるということはほとんどできない」[Fischer 1984=1996 p.251]。なぜなら、彼／彼女らは、私たちにとって関係のない存在者として映るからである。しかし、この一般化された他者というイメージは、社会的生活を送る人々にとって非常に重要な概念である。なぜなら当該社会における一般的な他者像が存在しなければ、私たちは他者とのコミュニケーションをどう開始してよいのか、どう進めればよいのか、まったくわからなくなると考えられる。一般的な他者とは、G・H・ミードの言う「一般化された他者」のことであり、当該社会における他者像の範型である。そしてコミュニケーションが進むにつれて、一般的な他者から具体的な他者へと、他者像は移行してゆく。



【図2】他者の四つのタイプ

[圓田 2003 p.192]

4. 出会い系におけるコミュニケーションの今後：リスクとコミュニケーションの自由

今後、出会い系におけるコミュニケーションはどうなっていくのだろうか？内閣府が行った調査では、出会い系サイトについて10代は容認派が多数を占める^⑧という。今後も、若年層での出会い系メディアの利用が増えていくと予測できる。

では、一般的に若者たちの多くは何を出会い系メディアに求めているのだろうか？その求めるものとは、金銭やセックスではなく、コミュニケーションそのものであると考えられる。一言で言えば、見知らぬ人（異性に限らず）とのコミュニケーションの快楽である。その内容は次のようなものが考えられる。演技のコミュニケーション、趣味を同じくする友達「趣味友」とのコミュニケーション、匿名的な出会いを通して肥大する性的欲望を充足するための秘密のコミュニケーションなどである。それぞれについて説明しよう。

演技のコミュニケーションとは、先ほども述べたように、出会い系サイトでは、簡単に性別、年齢、職業、住所などを偽ることができる。インターネット上の「ネカマ」はこのことを利用して、相手をからかったり、だましたりする。中には、男性なのに若い女性と偽って出会い系サイトで恋愛を持ち掛け、メールを交換し、そのメールをネット上に公開するネカマも存在する。これは悪質な例だが、女性が男性に、男性が女性になってコミュニケーションを楽しむことも可能である。

趣味友とのコミュニケーションとは、自分の趣味の合う友だちを出会い系サイトで探し、コミュニケーションを行うことである。例えば、趣味や趣向が細分化した現代社会では、特定の芸術家やその作品、マンガ、映画、マイナーミュージシャンについて語りたと思った場合、身近に語り合える人がいない場合が多くなっている。この場合に、出会い系メディア、特に何万人、何十万の会員数を抱える出会い系メディアは、利用者の希望する相手を性別、年齢、居住地から検索し、見つけ出してくれる。日常的で対面的なコミュニケーションの範囲では見つけられないコミュニケーション相手を出会い系サイトは見つけ出してくれるのである。

今日、新聞では連日のように児童買春や児童福祉法、青少年育成条例などの違反で成人男性が検挙される記事を見ることができる。これらの行為は一般的に「援交」、つまり「援助交際」と呼ばれている。かつては、テレクラが「犯罪の温床」と呼ばれ、規制の対象となり、メディアとしては衰退しつつある [圓田 2003]。代わりに登場した出会い系サイトは、携帯電話から簡単にアクセスでき、メールでコミュニケーションできるために、若年層では受容されつつある。しかしながら、出会い系メディアは「援助交際」のためのメディアではない。

今や出会い系メディアは、多様なコミュニケーションを媒介している。映画『ハル』や映画『You've Got Mail』、テレビ・ドラマ『WITH LOVE』で描かれたような恋愛のメディアでもある。趣味友の場合と同様に、私たちは対面的なコミュニケーションを行える範囲が非常に限定的であり、人数的に多くの人に接することは難しい。特に、「都市住民はいくつかの別個の社会的世界のなかに住んでおり、かれらはそれぞれの世界のなかで異なったパーソナリティを採用している」 [Fischer 1984=1996 p.246] と分析されているのが現代社会である。

出会い系サイトを利用すれば、適切的なパーソナリティをもつ他者を見つけたり、趣味を同じくする人、理想の恋愛相手と出会うことができるかもしれない。あるいは、今よりもっと良い社会生活を築きあえる他者を見つけることができるかもしれない。先ほどにも述べたように、「Yahoo!パーソナルズ」に登録されている自己紹介の数は7万件以上であり、「エキサイトフレンズ」では約350万人名の会員を擁している。私たちは、テレビや映画、マンガ、小説などといったメディアによって助長される恋愛イデオロギーに基づいて、肥大する恋愛や性的欲望を、出会い系メディアを利用することで実現し、あるいは充足できるかもしれないのである。

最後にあげられる秘密のコミュニケーションとは知らない人だから話せるというコミュニケー

ションである。日常の対面的な人間関係では口に出すことができない話題も、出会い系メディアで知り合った相手なら、コミュニケーションできる。中には、真剣に話を聞いてくれたり、アドバイスしてくれる人、同じ悩みを抱えている人がいるかもしれない。匿名で、年齢や性別、身分は簡単に偽れるのだから、別に会うことは前提としないが、コミュニケーションを行うことはできる。

以上のようなコミュニケーションは、図2の③→④の流れにある。全くコミュニケーションが生まれる余地のない場所から、現代社会で④の領域が誕生したことで、日常的なコミュニケーションとは異なる匿名的なコミュニケーションが誕生した。

もう少し言えば、出会い系における匿名的なコミュニケーションは出会うこと自体が目的とされているが、実態はそうではない。「自分の妄想の世界で相手のビジュアルをイメージし、その理想の姿カタチをなんとなく思い描きながら、メディアを介したコミュニケーションを重ねていく。相手は見ず知らずの人だから、会わなければ、理想のビジュアル・イメージは壊れずにすむ」[岩下 1999 p.55]。実際に会ってみると、出会うまでのコミュニケーションとは全く異なった人物であったりと、失望するケースが多いのもこのためである。むしろ、出会い系のコミュニケーションの本質は、知らない人とのコミュニケーションや出会うまでの過程を、匿名的な相手との想像上のコミュニケーションとして楽しむものだと言える。「会わないほうがイメージは保たれる。現実に対面すると、ギャップを感じるだけでなく、幻滅することさえある。あらかじめ自分に都合のいいビジュアルを勝手にイメージしてしまっているからだ」[岩下 1999 p.107]。このコミュニケーションの特質こそ、匿名的な親密さの産物と言えよう。出会い系メディアを通じて会った時、それまで抱いていた相手のイメージと出会った時のイメージの落差の大きさが原因で対面的な付き合いがうまくいかなくなる事例が報告されている [加藤 2001 p.135]。

以上のことから、出会い系メディアのコミュニケーションは次のように言えるかもしれない。イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズは、「純粋な関係性」を次のように定義している。「社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手との結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感を互いの関係が生みだしていると思えず限りにおいて関係を続けていく、そうした状況を指している」[Giddens 1992=1995 p.90]。出会い系メディアのコミュニケーションの本質もまた、出会いに至る過程においては、コミュニケーションのためのコミュニケーションであり、「純粋のコミュニケーション」と言えるのではないだろうか？

この変化は、新しいメディアが登場したことで、コミュニケーションの作法そのものが大きく変わったことに原因があることをまず認識すべきである。この作法こそ、出会い系メディアのコミュニケーションの本質、特定の手続きをとれば、知らない人と話すことができることを指している。原因は出会い系メディアそのものにあるのではなく、人々のコミュニケーションに対する願望や期待にある。その願望や期待とは、自分をより理解してほしい、特定の話題について満足できるコミュニケーションが可能な相手がほしい、自分の秘密や日常では語ることでできないようなことを話せる相手がほしいといったものである。

今後、現代社会においては、フィッシャーの指摘する「都市的疎外」[Fischer 1984=1996 p.213] や、ギデンズの言う「顔の見えないコミットメント」[Giddens 1990=1993 p.102]が増えていけよう。「孤独感や他者からの拒絶されているという感覚」をもつ「社会的孤立者」[Fischer 1984=1996 p.237]が増えていけよう。そしてそれにとまって、人格的信頼ではなく、社会的なものへの信用を糧に相手の信憑性を求めるコミュニケーションが増加していくことだろう。この流れは、情報化、IT化、グローバル化の流れでは不可避であると考えられる。そして、出会い系メディア、特に出会い系サイトの利用の増加、つまり匿名的な関係に基づくコ

コミュニケーションは今後増えていくと予測できる。それにもなつて、出会い系サイトに関する事件や犯罪は今後も発生し続け、モラルの低下をもたらし、メディアへのバッシングが増加し、新しい何らかの規制を誕生させるかもしれない。しかし、いわば「出会い系メディア悪玉論」と規制問題だけでは、大事な観点を見落とすことになってしまう。コミュニケーション論的に、「なぜ人は、危険を伴うかもしれないのに見知らぬ人とコミュニケーションを行い、また出会うとするのか？」という問題を今後も考えて行かねばならないだろう。

註

- ① 「電話風俗空間は、こうした「接続」「出会い」「親密さ」への転換が、有料サービスとして提供されているシステムである」[加藤 2001 p.76]。
- ② メールでの出会いやコミュニケーションの特質について、映画『ハル』(1995年)では「こうやってメールを書くのって気分良いです。まっすぐな気持ちになれます」、「メールで書くと素直になれます」。テレビドラマ『WITH LOVE』(1998年)では「何ひとつわかり合えなかったのは体を重ねたせいじゃなく、ことばを重ねなかったから」、映画『You've Got Mail』(1998年)では「あなたといると本当の自分になれる」といったセリフが見いだされる[加藤 2001 p.127]。
- ③ 法律的には、「出会い系サイト」とはインターネット異性紹介事業のことをさす。具体的に言うと、「異性交際を希望する者の求めに応じて、その異性交際に関する情報をインターネットを利用して誰でも閲覧できる状態にしてこれを伝達し、この伝達を受けた異性交際希望者が電子メール等を利用して相互に連絡ができるようにする役務を提供する事業」である。要するに、パソコンや携帯電話でインターネットに接続し、ウェブサイト上で、コミュニケーションや交際を目的に、主に異性とのメールなどで連絡を取り合う行為をさす。
- ④ 全国の15歳以上の男女5,000人(有効回答数3,247人)を対象に、2002年の8月に内閣府によっておこなわれた調査がある。そこでは、出会い系サイトの利用に関する質問では、「実際に利用したことがある」は全体の2.5%、「見たことはあるが実際に利用したことはない」は10.3%となった。利用およびアクセス経験者は全体では少数だが、世代別で大きくばらつきがある。割合でみると20代(20~29歳)の利用・アクセス経験が最も高く、「実際に利用」が男性11.8%、女性8.3%。また「見たことがある」が男性36.4%、女性25.0%となった。20代の男性は、ほぼ半数が出会い系サイトにアクセスした経験を持つことになる。次いで多いのは10代で、15~19歳では「実際に利用」が男性12.6%・女性7.4%、「見たことがある」が男性24.2%、女性22.2%。実際に利用した経験では、10代男性が最も高い数字となった(<http://www8.cao.go.jp/survey/h14/jido-sakushu/>)。
- ⑤ 現代社会で、親密な関係が築けない原因について、W. ボガードは次のように述べている。「若い人たちが伝統的な家族構造から解放されることで、実際には私的領域は拡大し、信頼の根本的な危機をうみだしている。プライバシーが拡大しすぎ、社会関係のなかで信頼を築けるほど親密になれない」[Bogard 1996=1998 p.234]。
- ⑥ 筆者は信頼と信用を区別して使用している。信頼が対面的な社会関係でその個人の人格に諸期待の根拠を置くのに対して、信用は個人の人格ではなくその社会的な属性(人種や国籍・居住区・地位・学歴など)に諸期待の根拠を置くものとして考えている。
- ⑦ 「リスク」という単語は、一七世紀に英語に入ってきたらしい。「危険に陥る」、「座礁する」という意味のスペイン海軍用語におそらく由来している[Giddens 1990=1993 p.47]。
- ⑧ 1920年代に合衆国の都市シカゴで活躍した社会学者のP. クレシーが述べるように、「匿名の人物は本質的に脱道徳な人である」[Cressey 1983 p.112]。匿名的なコミュニケーション

ンの内容は、通常の道徳規範から離れるため、話題の選択や価値判断が通常とは大きく異なる傾向を有する。

⑨ 特に15～17歳で、「利用することはかまわない」が男性34.5%・女性30.0%と高くなっているのが特徴的である。また20代男性も、「利用することはかまわない」が28.3%、「条件付であれば」が34.2%と高い〔内閣府大臣官房政府広報室 2002〕。

参考文献

- Bogard, W. 1996=1998 *The simulation of surveillance*, Cambridge University Press : 田畑暁生訳 『監視ゲーム』 アスペクト
- Cressey, P.G. 1983 "A comparison of the roles of the 'sociological stranger' and the 'anonymous stranger' in field research", *Urban life* vol.12 no.1 pp.102-120 Sage Publications
- Fischer, Claude S. 1984=1996 *The urban experience* Harcourt Brace Jovanovich : 松本康・前田尚子訳 『都市的体験：都市生活の社会心理学』 未来社
- Giddens, Anthony. 1990=1993 *Modernity and utopia*, Polity Press : 松尾精文・小幡正敏訳 『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』 而立書房
- Giddens, Anthony. 1992=1995 *The transformation of intimacy : sexuality, love and eroticism in modern societies*, Polity Press : 松尾精文・松川昭子訳 『親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』 而立書房
- 速水由紀子 1999 『家族卒業』 紀伊國屋書店
- 井上善友 2002 「出会い系サイトの流行と現代の恋愛・結婚事情」『情報通信学会年報13』 pp.35-50
- インターネット上の少年に有害なコンテンツ対策研究会 2003 『インターネット上の少年に有害なコンテンツ対策研究報告書』 <http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen4/houkokusho.pdf>
- 岩下久美子 1999 『ヴァーチャルLOVE』 扶桑社
- 加藤晴明 2001 『メディア文化の社会学』 福村出版
- 警察庁 2005 「平成16年中のいわゆる出会い系サイトに関係した事件の検挙状況について」 <http://www.npa.go.jp/cyber/statics/h16/image/pdf21.pdf>
- 内閣府大臣官房政府広報室 2002 「児童の性的搾取に関する世論調査」 <http://www8.cao.go.jp/survey/h14/jido-sakushu/>
- 圓田浩二 2001 『誰が誰に何を売なのか？：援助交際に見る性・愛・コミュニケーション』 関西学院大学出版会
- 圓田浩二 2003 「沖縄テレクラ社会史：テレクラ規制がもたらしたもの」 『沖縄大学地域研究所報』第30号 pp.121-132
- 宮台真司 1997 『まぼろしの郊外』 朝日新聞社
- Park, R.E. 1916=1965 "The City", *American journal of sociology* vol.20, Chicago: Place of publication, 577-612 : 笹森秀雄訳「都市」鈴木広編訳『都市化の社会学』誠信書房
- 鈴木謙介 2002 『暴走するインターネット：ネット社会に何が起きているか』 イースト・プレス
- 富田英典・岡田朋之・高広伯彦・藤本憲一・松田美佐 1997 『ポケベル・ケータイ主義！』 ジャストシステム

The analysis about communications of the meeting system through media: Anonymous Intimacy in Contemporary Society

Koji MARUTA

Abstract

This paper takes up communications between people meeting through the media that tend to be the subject of social criticism. The question of why people use online dating services is considered from the viewpoint of , "anonymous intimacy in contemporary society," referring to the history and the transition to the system of meeting through the media, as well as the characteristics and the possibilities of communications presented by meeting through the media. A meeting system of this kind indicates that these media mediate communications with unspecified other. It is thought that the perceived benefit of communications through this meeting system is in the pleasure of communications with a stranger (not limited to the opposite sex). The pleasures are; communication through role-playing (acting), communication with those who share interests (hobbies, etc.), desire for sex and romance which are intensified through the anonymous encounter, secret communications, and so on.

Keywords: meeting system through media, anonymous intimacy, communication